

第9部 ソフトウェアの要件定義

ソフトウェア工学の領域には、ソフトウェアの開発を支援する機能の集まりに加えて、ソフトウェアのライフサイクル（一生）全体をカバーしている部分がある。この部を含む第8部から第13部までで、このソフトウェアのライフサイクル全体をカバーすることにする。

第8部のソフトウェアの企画は、狭い意味でのソフトウェアのライフサイクルには含まれないかもしれない。しかしあるソフトウェアについて開発することがここで提案され、それに基づいてこの開発について責任を持っている人や組織が決裁すると、ソフトウェアの開発が始まる。この第9部は、そのソフトウェアの狭い意味でのライフサイクルの最初に位置する「ソフトウェアの要件定義」について議論する。

ケイパース・ジョーンズ (Capers Jones) によると、2003年時点で要求を収集する方法が40種類、ソフトウェアを設計する方法が50種類、プロジェクトに適用するテストが30種類、プロジェクトに使用するプログラム言語が700種類以上あるとのことである[MCC05]¹。今は、この数はもっと増えているかもしれない。その40種類あるという要求を収集し、整理する方法のいくつかを、この部の中の章で述べる。

その最初の第20章では、要求仕様書について述べる。要求仕様書は開発されるソフトウェアの利用者（ユーザ）の立場から期待する、そのソフトウェアが持っていて欲しい機能などについて記述したものである。ユーザの夢が書かれていても良い。

続いて第21章で記述する要件定義書は、ソフトウェアの開発を委託しようとするユーザ企業が、その開発を受託するソフトウェア会社などに対して、どのようなソフトウェアが必要であるかを提示するたいへん重要な文書である。第20章で述べる要求仕様書が作成される場合には、この要求仕様書が要件定義書のベースになる。

その後の第22章で、要件定義や要求分析で使用するモデルについて記述する。モデルは文章で書かれる要件定義などを補い、それを理解する上でたいへん重要なものである。

まずは、要求仕様書作成についての話である。

人名

ケイパース・ジョーンズ (Capers Jones)

参考文献とリンク先

[MCC05] Steve McConnel 著、(株) クイープ訳、「Code Complete 第2版」、日経BP社、2014年。

この本の原書は、以下のものである。

Steve McConnell, “Code Complete: A Practical Handbook of Software Construction, 2nd Edition,” Microsoft Press, 2004.

¹ Aさんの文章が記載されている内容をBさんの本から引用することを「孫引き」といい、文章を書くときにしてはいけないことの1つである。ここで私は、孫引きをしている。いずれかの機会に Capers Jones のオリジナルの文献に当たり、確認の上この孫引きを解消したい。

